

《2023年2月（通算316回）公開サロン報告》

第13回国際ピエール・ド・クーベルタン ユースフォーラム報告 ーコロナ禍のオリンピック教育ー

内藤 智（中京大学附属中京高校）

【日時】2023年2月22日（木）19:30～21:30 ※終了後はオンライン懇親会（～23:30）

【会場】オンライン（Zoom）

【テーマ】第13回国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム報告
ーコロナ禍でのオリンピック教育

【演者】内藤智（中京大学附属中京高校）

【コーディネーター】中塚義実（筑波大学附属高校／NPOサロン2002理事長）

【参加者（サロンファミリー）5名】 ★はNPOサロン2002会員

★小池靖（在さいたまサッカースポーツ少年団指導者／長野県在住／会社員）、★笹原勉（日揮グローバル株式会社／台北在住）、★中塚義実（NPOサロン2002理事長／筑波大学附属高校）、柳りこ（多摩大学経営情報学部事業構想学科3年）、吉原尊男

【参加者（サロンファミリー外）6名】

青柳秀幸（JOAオリンピック教育研究部門委員／国士舘大学大学院）、塩田憲一（豊南高校教諭）、田原淳子（国士舘大学）、内藤智（中京大附属中京高校）、山田恵子（自由学園女子部）、來田享子（中京大学）

【懇親会からの参加者】春日大樹

【報告書作成】柳りこ

【目次】

はじめに

- I. 選考から派遣まで
- II. 国際ユースフォーラムの実際①ー異文化理解と交流
- III. 国際ユースフォーラムの実際②ー印象的なプログラム
- IV. 国内ユースフォーラム2022ーTOKYO2020のレガシー

【キーワード】

国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム、日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム、オリンピック教育、国際YF、国内YF、オリンピック・パラリンピック教育、オリパラ教育、CIPC、CJPC、ミュンヘン

はじめに

ドイツで開かれた国際ピエール・ド・クーベルタンニュースフォーラム（国際 YF）の引率をしました内藤と申します。いつもこの話を、当事者としてでなく他人事のように聞いていましたが、今回ドイツに行って貴重な経験をする事ができ、オリンピズムを自分自身の経験として語れるようになりました。コロナ禍で縮小気味ではありましたが、私にとっては初めてでの国際 YF です。今までと何が違うのかもわかりませんが、報告させていただきます。

例年であれば派遣高校生は7名ですが、今回は5名でした。私は中京大中京高校という、名古屋にある私立の学校で保健体育の教員をしています。水泳部の顧問です。水泳部は強化部ということもあり、一年のうちほとんど水泳に時間を割いています。国際 YF 引率の話は以前からいただいていたがタイミングが合わず、今回は11月開催ということで都合が付き、行くことができました。国内 YF には2014年度から携わっています。中京大附高の生徒の引率で国内 YF や、国際 YF 派遣生徒の事前研修に参加してきましたが、今回初めて日本チームの引率として国際 YF に参加しました。

I. 選考から派遣まで

派遣生徒は、名古屋大附の部田（とりた）さん、中京大附の三村さん、自由学園の中畝君、国士館高の西村さん、筑波大附の飯塚さんです。半数が中部、半数が関東ということで、オンラインを含めた事前準備ができたのは今後につながると思います。普段関わらない生徒とともに海外に行く経験は新鮮でした。国内で新たなつながりができたのは、彼らにとっても良いことだと思います。

2021年12月25日(土)～26日(日)に、派遣生徒の選考を兼ねた国内 YF をすべてオンラインで行いました。7名の生徒が選ばれましたが、コロナ禍に加えてのウクライナ情勢です。当初のキプロス開催からミュンヘンへ開催地が変更になり、規模も縮小。各国4名とするよう連絡があったのが3月末です。4月に改めて選考結果が通知されましたが、田原先生の働きかけもあって日本から1名追加となり、補欠だった生徒が繰り上がって5名で参加できるようになりました。

私への引率打診は早くからありました。当初はキプロスで10月に開催だったので試合と重なり、引率は難しかったのですが、最終的に11月のドイツに変更となったので行けることになりました。

派遣生徒の第1回準備会は6月8日にオンラインで行われました。生徒同士はLINEで繋がります。直接会わなくても、できることはオンラインでできたので準備はとても楽になったと思います。11月の派遣だったので、時間をかけてゆっくり進めることができました。

第2回研修会は7月29日にオンラインで、筆記テストの準備や、各国の文化紹介としてのダンスやミニエキスポなど、これまでの国際 YF の様子を紹介してもらいながらイメージを作りました。

そして2022年10月1日(土)～2日(日)に、はじめて全員が集まります。オンラインでつながっていたからか、名古屋駅に

国際YF 選考～派遣まで (準備)

2021年12月 国内YFにて選考
3月 選考結果の通知 (4名選考+その後1名追加)

2022年6月8日 18時30分～
オンラインで実施(自己紹介・国際YFの概要・今後の予定)

7月29日
国際YFについて・知識テスト対策・ミニエキスポ・ダンスについて

10月1～2日(土日)
1日目:中京大学 ミュージアム見学・スポーツ活動・講義・話し合い
2日目:中京大学附属中京高校 ダンス・講義・ミニエキスポの準備

初めて対面
オンラインの普及により準備がスムーズに

国際ピエール・ド・クーベルタンYF (ミュンヘン) -参加報告-

集合した時点ですでに仲が良く、お互いにコミュニケーションが取れる状態で準備会が進みました。事前研修はこれまで首都圏での開催でしたが、今回初めて東海地方に来ていただきました。中京大学のミュージアムを見て、きれいな体育館でスポーツ活動をし、夜の時間も出し物の準備やアイスブレイクができました。2日目は中京大中京高校に来て、続きの活動をしました。お互いの仲が深まったことは大きな成果だと思います。出し物の中身も決まったので、1か月後に向けてすべきことが明確になりました。



過去 国際YF開催地

2014年筑波国内YFより参加

第1回 1997年 ル・アーブル (フランス)	第10回 2015年 ビエスタニ(スロバキア)...
第2回 1999年 マッチ・ウェンロック(イギリス)	筑附・自由学園・中京・帝京から7名
第3回 2001年 ローザンヌ (スイス)	第11回 2017年 ウルヌルメ(エストニア)...
第4回 2003年 アレンツァーノ (イタリア)	筑附・自由学園・中京・至学館高から7名
第5回 2005年 ラートシュタット (オーストリア)	第12回 2019年 フランス (マコン)...
第6回 2007年 ターボル (チェコ共和国)	筑附・自由学園・中京・坂戸から6名
第7回 2009年 オリンピア (ギリシア)	第13回 2022年 ドイツ (ミュンヘン)...
第8回 2011年 北京 (中国)	筑附・自由学園・中京・名大附・国土館5名
第9回 2013年 リレハンメル (ノルウェー)	第14回 2024年 Next... (未定)
筑波大附高(筑附)から2名参加	

前回は2019年のマコン（フランス）でした。第13回大会は本来2021年の開催でしたが、コロナ禍で1年延期となりました。ドイツ・ミュンヘンでの開催です。例年は20から25か国の参加ですが、今回は18か国。各国7名の派遣生徒は3名程度となり、日本の5名はもっとも多い団体でした。これだけ人数がいて、現地でも動きやすかったというのが正直なところ。期間のほうも、例年は1週間余りでしたが、今回のプログラムは4日程度で、あっという間に終わってしまったなという印象です。この4日間で交流があり、スポーツがあり、芸術の共同作業やディスカッションがありと、密度の濃い4日間でした。次回は2024年ということで、内容と日程がどうなっているかが興味を持たれていました。ヨーロッパの教員たちからは「もっと東に行きたい」との声が上がっていました。国際YFがヨーロッパ以外で開催されたのは2011年の北京（中国）のみです。「是非日本で！」という話が出ていたのも事実です。

私自身、2014年度から国内YFにかかわりを持っていましたが、5名の生徒を引率して、私自身初めてのドイツに行かせていただき、非常に楽しい時間をすごしてきました。

大きなオリンピック記念公園があります。1972年のミュンヘンオリンピックの会場がそのまま残っています。日本にはないようなとても大きな公園で、びっくりしました。

中塚：少し補足させてください。中京大での事前研修に参加しましたが、内藤さんがおっしゃるとおり、最初から仲良かったのが印象的です。東京からの参加者は「10時9分東京発の新幹線1号車に集合」でしたが、飯塚さんと西村さんが東京～名古屋の2時間、ほぼノンストップで話し続けたのでびっくりしました。自由学園男子部の中畝君もいましたが、女子二人の猛烈なトークに圧倒されてい

たようです。普段は男子校にいたので戸惑ったのもあるでしょう。彼が現地でずいぶん変わったという話も聞いています。

オンラインでいろいろできるなと感じました。今まで東京に何度か集まって事前研修をしましたが、対面研修を減らしてもできるだろうと思います。もちろん対面のほうがはるかに成果は上がりま
すし不可欠ですが、オンラインと対面を併用することが大切だと感じました。

II. 国際ユースフォーラムの実際①ー異文化理解と交流

私自身ヨーロッパに行くのは初めてでした。それぞれの国の良さはあるのですが、街並みがとてもきれいでした。ミュンヘンは都会だなという印象ですが、私たちがいたところはミュンヘン市街から車で1時間のところで、すごくのどかなところでした。

ドイツへの移動は大変で、丸2日ぐらい飛行機で移動しました。ミュンヘンでは現地スタッフに迎えに来てもらい、そこからプラッハという町へ移動してこの期間を過ごしました。泊まっていたのはお城です。食堂もあるしホールもあります。大きな施設ではありませんが、貸し切り状態でした。宿泊施設から出ることはほぼありません。自由時間等を使ってプラッハの街並みを散策しました。広い街ではありません。5~10分あれば端まで行ってしまうようなところですが、どの家も庭が広く、きれいで良い街並みでした。



実際の活動ですが、最初に到着したのが日本チームです。朝に着きました。みんなが合流したのは夕方だったので、日本だけで昼食をとったり話している時間が半日ぐらいありました。最後のほうに南アフリカの2人が合流しましたが、初日は城の中でご飯を食べて話しているという、すごくのんびりなスタートでした。アスレチックや散歩できる場所もあり、とても良い施設でした。

着いたのは11月1日。ディナーの18時ごろにみんなが集まってきましたが、我々は11時ぐらいにはそこにおいて、何もしていない時間が長かったです。11月1日にはじまって最終日は6日。4~5日ですべての活動を行います。本当にあっという間でした。行くまではずっと動いているのかと思っていま

したがそんなこともなく、自由な感じでどんどん進んでいる印象があります。最終日は朝の4時に出発です。1日に着いて6日の夜中には終わったので、あっという間でした。

今回の施設は今までより広いと聞きました。共同生活ということで、生徒は4~5人が一部屋です。二段ベッドが二つあります。結構きしむので、上の人が動いたら大変だなと感じました。教員に関しては2人部屋で、二段ベッドが二つあってそれぞれのスペースで過ごします。ノルウェーの先生と同部屋で、いろいろなことを教えてくださったし、優しく迎えてくれたということで感謝しています。今でも連絡をして繋がっています。寝るところからホールは歩いて1分。この施設内で完結するので、みんなにすぐ会えるというのは良いところでした。



今回の宿泊施設	
	
他国の生徒・教員と共同生活	
今回は6泊7日 4人~5人で1つの部屋に生活 事前に決められたプログラムを実施	
ちなみに教員も共同生活 私はノルウェーのスタイン先生と同室（	

このような形で11月1日の夜から共同生活がスタートしました。生徒の感想が多かったのが、文化的な交流です。ダンスやミニエキスポは生徒にとって他国の文化を知り、自分自身の文化を再認識しながら共有する機会であり印象に残っているといた感想が多かったです。

日本のミニエキスポは縁日のようなものを用意しました。日本のお菓子が人気で、みんなお菓子を配りながらコミュニケーションをとっていました。

ディスコは毎晩していました。日本にはない習慣で、生徒もちろん踊っていましたが、教員もティーチャーズミーティングで踊ったり歌ったりしています。これは日本にない文化で、私にとっては衝撃的でした。文化の違いを知ることは良い経験になったし生徒もびっくりしていました。ディスコの中でお互いに仲良くなり、コミュニケーションをとっているのがよかったと思います。ホールの中でやりましたが、ダンスやミニエキスポをするには狭かったですね。全体を把握できるという面ではよかったのですが、活動場所としては狭かったという印象です。

日本チームのお菓子は人気で、すべてなくなりました。教室の机一個分のところにすべて乗せたので狭かったのですが、その分コミュニケーションは取りやすかったです。地元新聞の方も来て、いろいろ質問していました。こういった時間も生徒にとっては良かったという感想がありました。

日本チームの出し物のダンスは、最初は「オタゲーをやるか」と言っていましたが、最終的にはソーラン節になりました。日本の文化には興味を持ってもらうことができ、日本のダンスは非常に好

評だったと思います。ダンスの時間は決まっていないので、巻き込み展開する国や伝統的なダンスをやっている国もありました。フランスの、お尻を振るダンスは楽しそうでした。最後は教員交えてのダンスが始まり、知らない間に終わっていました。日本の文化を知ってもらううえで非常に良かったし、お互いに教えあうことで交流ができました。



アート活動は、今回3つのプログラムが用意されていました。音楽、ダンス、そして絵画の作品づくりで、各プログラムに生徒が割り振られました。飯塚さんが音楽、西村さんと中敏君がダンス、三

村さんと部田さんが絵画に割り振られ、三つの教室に分かれて3回ほど行われました。3回目は発表に向けての準備を各自進める形だったので、実質2回の活動でした。

絵画の作品作りは、その国の色で楽譜を創るというものです。担当の先生が来られなくなって内容が変わったそうですが、ひたすら絵を塗っているだけなので暇そうにしていました。その分、お互いに話をしながらゆったりと時間を過ごしていました。一番楽しそうだったのは音楽グループです。オーストリアの音楽の先生が担当で、体を使った音楽をやっていました。大変そうでしたが「楽しかった!」という感想が多かったです。音楽もホールでやっていたのでよく聞こえてきました。飯塚さんはいろいろなところでコミュニケーションをとってリーダーシップを発揮していました。日本の中でもそういった立場でしたし、みんなの前に出る機会も多かったと思います。ダンスグループは創作ダンスの発表に向けて準備していました。「えっ創作ダンス?」みたいな感じで戸惑ってはいましたが、クロージングセレモニーではしっかりと発表していました。



ディスカッションも3回ほど、プログラムに入っていました。テーマは国際的な友好と平和ということで、今の国際情勢を踏まえ、教師ミーティングでもすごく気になるテーマだと言っていました。

ロシアは今回参加しませんでした。ディスカッション自体、今回はやめようかという話も出ましたが、こういうときだからこそ友好と平和について話し合い、お互いに理解を深め合うべきではないかということで、ディスカッションの時間が確保されました。話し合いの写真をみると、一生懸命やっているようですが、事前にポスターを作ってきたのは日本だけ。日本人の勤勉性が出ていて、ほかは自由な感じで、中心的なメンバーだけで話し合いを進めていたところもありました。

クロージングセレモニーでは飯塚さんがグループの代表として発表をしていました。国際情勢を踏まえ、すごく考えなければいけないことだと思いました。ウクライナからは3人参加していました。戦地からは比較的遠いということで、ここに来たときは自分たちの住んでいるところはまだ大丈夫ですと言っていました。帰ったら電気が通じなくなっていたという話を聞きました。このタイミングでウクライナのこと、戦争のことを、国際 YF で話し合うことができたのは大きかったと思いますし、日本の生徒たちにもとても考えさせられる機会だったと思います。



ディスカッション

英語/フランス語でのディスカッション（3回）

Topic 1 : International friendship and peace

『 国際的な友好と平和 』

Topic 2 : The challenge of protecting our environment and organizing “Sustainable Olympics”

『 環境保護への挑戦と「持続可能なオリンピック」の開催 』

知識テスト



13th International Pierre de Coubertin Youth Forum Munich 2022 Knowledge Test

Part A : The Ancient Olympic Games

1. There are many legends about the beginning of the Ancient Olympic Games. According to the most famous legend, who was their founder?
 Paris Achilles Heracles Zeus
2. A. When were the Ancient Olympic Games held for the first time?
 1896 B.C. 776 B.C. 1896 A.D.
- B. Name five events of the Ancient Games.
1. Long jump with weights
2. Discus throw
3. Javelin
4. Shooting
5. Wrestling
- C. The word "stadium" got its name from the word "Stadion". What is the original meaning of the word "Stadion"?
 Sports Arena Unit of measurement Theatre
- D. The Ancient Olympic Games were not only an athletic event. The Greek came together for the Games in order to worship a god or goddess. (Write his/her name.)
The god Zeus
- E. In which other field did the Games influence the life of the people in Ancient Greece during their duration?
Peace during the Olympic games, the war stopped.
- F. According to the rules, who was NOT authorized to compete in the Ancient Olympic Games? (Give two answers.)
1. Women
2. Slaves
- G. According to the history books, when were the Ancient Olympic Games held for the last time?
 393 B.C. 393 A.D. 776 A.D.

知識テストも日本人の性格が出ていました。我々は羽田空港でも勉強をしているような、すごくまじめな集団でした。現地入りしてからも勉強している人たちがいました。講義で出てきた内容のほか、オリンピックをめぐる一般的なことが出題されましたが、みんな苦戦していました。みんな20点ぐらいでした。今回は合格・不合格はつきませんでした。勉強した成果が十分出せたかということ、あまり出せなかったのではないかと思います。チェコの生徒は5分ぐらいで書き終わっていました。他国からはクーベルタンスクールの生徒が多く、日常的に学んでいるから問題ないよという生徒も多

かったです。そういった知識も、学校のなかで教えているのかと感じました。できる子は簡単に解いていたし、苦戦している子もいました。

「静かに」「不正行為をしないように」と先生たちが厳しいチェックをしながら行われました。フランス語と英語の2パターンが用意されていてどちらかを回答しました。試験会場もお城の中で、ダンスをやっていた会場です。アクティビティはほぼホールで行われ、あまり外には出ませんでした。

Tuesday, 1st November 2022

Arrival in the afternoon

Welcome to the delegations:
The delegates check in at Castle "Schwanegg",
Selection of sporting activities



18.00 Dinner
20.00 Informational meeting to everyone
Knights' Hall
20.15 Social evening for the Youth
Knights' Hall
20.30 First teachers' meeting, Café
22.30 Bedtime

Wednesday, 2nd November 2022

8.00 Breakfast
8.30 Teachers' meeting, Knights' Hall
9.00 **Lecture A:** Prof. Dr. Stephan Wassong, IPCC President (English), Knights' Hall
Lecture B: Dr. Ines Nikolaus, IPCC Vice-President, Delegate for the International Network of Coubertin Schools (French), Café international
11.00 Visit of Pullach – Free time
13.00 Lunch
14.00 Preparation for the Opening Ceremony/
15.30 Selection of sporting activities
16.00 Opening Ceremony, Knights' Hall
18.00 Dinner
20.00 Disco, Knights' Hall
20.30 Teachers' meeting
22.30 Bedtime

Thursday, 3rd November 2022

7.00 Morning gymnastics
7.30 Teachers' meeting
8.00 Breakfast
8.30 **Discipline of the Coubertin Award:**
10.00 **Discussion topic 1**
10.30 **Discipline of the Coubertin Award:**
Cross-country race



13.00 Lunch
14.00 **Discipline of the Coubertin Award:**
14.00 **Arts workshop 1**
16.00 **Discipline of the Coubertin Award:**
Knowledge Test
17.00 Free time/Preparation for the Mini-Expo
18.00 Dinner
19.30 Mini-Expo, Knights' Hall
21.00 International dances, Knights' Hall
22.30 Bedtime

Friday, 4th November 2022

7.00 Morning gymnastics
8.00 Breakfast
9.00 **Discipline of the Coubertin Award:**
12.00 **Sports competitions**
13.00 Lunch
14.00 Teachers' meeting
14.30 **Discipline of the Coubertin Award:**
Arts workshop 2
16.00 **Discipline of the Coubertin Award:**
Discussion topic 2
18.00 Dinner
19.00 Free time/Optional Sports activities
20.00 Singing/Playing Games
Board Games, Chess, Origami
22.30 Bedtime

Saturday, 5th November 2022

7.00 Morning gymnastics
7.30 Teachers' meeting
8.00 Breakfast
8.30 **Discipline of the Coubertin Award:**
10.30 **Arts workshop 3**
11.00 Improving your sporting abilities
Paralympic sports and games
13.00 Lunch
14.00 Free time
15.30 Packing suitcases/backpacks
16.00 Rehearsals for the presentations of the Arts
Workshops
18.00 Dinner
19.30 Closing Ceremony + Presentation of the Arts
Workshops/Discussion groups + Disco
22.30 Bedtime

Sunday, 6th November 2022

7.00 Wake up
Preparation for departure
8.00 Breakfast
9.00 **Excursion to Munich (Packed Lunch)**
17.00 Guided tour through the Olympia Park of
Munich 1972
Visit of BMW World
Guided Tour through Munich City
Free time



Olympia Park of Munich 1972



Munich centre

17.00 Departure to the Youth Hostel in
Possenhofen
18.00 Dinner
19.00 Farewell party
22.00 Bedtime

Monday, 7th November 2022

7.00 Wake up/Preparation for departure
7.30 Breakfast
Departure of the delegations



Youth Hostel Possenhofen



Lake Starnberg

Organisation

Comité International Pierre de Coubertin (CIPC)
International Pierre de Coubertin Committee (IPCC)



Séjour / Headquarters:
Hotel Continental
Place de la Gare 2,
1001 Lausanne
Suisse / Switzerland

E-Mail: info@coubertin.org
Website: www.coubertin.org
President: Univ. Prof. Dr. Stephan Wassong
E-mail: Wassong@dsbs-voeln.de

Vice-President, Delegate for the International Network of
Coubertin Schools:
Dr. Ines Nikolaus
Tel.: 0049 36200 70225
E-mail: ines.nikolaus@web.de

Forum Sites:

Youth Hostel "Schwanegg" in Pullach
Burgweg 4 – 6
D-82049 Pullach
Tel. +49 89 74486670
Fax. +49 89 74486680
<http://www.jugendherberge-burgschwanegg.de>

Youth Hostel (Jugendherberge) Possenhofen
Kurt-Straßer-Straße 18
D-82343 Pöcking
Tel. +49 8157 9966-11
Fax +49 8157 9966-12
www.possenhofen.jugendherberge.de

Comité International Pierre de Coubertin (CIPC)
International Pierre de Coubertin Committee (IPCC)
13th International Pierre de Coubertin Youth Forum

Programme



München 2022

Munich/Germany

1st - 7th November 2022

<ディスカッション①>

中塚：ディスカッションのグループは？

内藤：アートパフォーマンスのグループをそれぞれ二つに分け、計6グループつくりました。分け方は現地で知りました。しっかりやっているグループと適当にやっているグループがありました。

山田：前回のユースフォーラムでは、ディスカッションの時間はグループ毎にいろいろな場所に出向いて行いました。体育館でパラスポーツ用の車いすに乗って話すグループや、屋外で集まっているグループ、セーフティマットに寝転がりながら行うグループなど、自由な雰囲気でしたが、課題に対してはみんなで話し合っている感じがありました。会場全体がスポーツ施設だったのでその中で完結することもできたのですが、発表をするときは少し離れたホールに出かけるなど、一つひとつの活動を別の場所に出かけて行っていました。歩いて行ったりバスで行ったり。それが緊張感をもたらしました。いまの話だと、みんながすごく近くにいる、顔が見える範囲でいろいろなことができているので、互いにつながりやすいのかなと思いました。

内藤：今回はいつもより参加者が少なく、各国3~4人で18か国なので、みなが顔見知りになれるサイズです。話をしていない子がほとんどいないというぐらい、みなと接点を持つことができました。この点に関しては、先生たちもよかったと言っていました。これがまた各国7人に戻ると運営側もすごく大変だなという印象です。小さい規模ならではの良さを感じました。

青柳：引率教員の中で音楽指導の先生がおられたとのこと。その先生は、クーベルタン委員会やオリンピック自体とどのような関わりを持っておられるのでしょうか。ほかにも海外の引率者の先生の専門分野を教えてください。

内藤：何の先生か、全員は把握していないが、音楽担当の先生は普段から音楽を教えている先生です。オーストリアからは2校来ていて顔見知り。初めて参加する先生が少数派でした。クーベルタンスクールの繋がりでいつも来ている先生が続けて参加しています。国内 YF と同じような状態なのだと思います。

青柳：今後、日本においても、体育・スポーツ以外の先生方とのコラボレーションがあるとよいのではと思いました。

中塚：一つの学校の生徒数についての感触を教えてください。今回3~4人ということだったが、その人数でよかったのか。それとも7人のほうが良かったと思うか。そのあたりを教えてください。

内藤：7人だとどうなるのかわかりませんが、2~3人の国が多く、日本の5人はすごく多く見えました。全員と顔見知りになれるという点ではこの規模の良さがあると思いますが、一つひとつの、あるいは全体としてのプログラムは小さくなってしまいます。宿泊施設や移動を考えると、今回はこの人数が妥当だったと思います。

中塚：パフォーマンスをするには7人がベストとの意見が以前からありましたが、それについてはどうですか。

内藤：ダンスを見ると、やはり2~3人よりも、日本のように5人いるほうが迫力もあり、寂しくなくできました。今回のホールは狭かったので、7人は入れなかったなと思います。5人がちょうどよい。

田原：国際 YF のあり方については議論していかなければいけないところです。今回は人数を減らし、特定のホスト校ありません。これはいつもと大きく異なるところです。これまでは、宿泊するところがあり、うち何日かはホスト校に出向いて筆記試験やスポーツテストをするようなプログラムでした。今回の経験を踏まえ、これからどうするかという議論につながっていくと思います。主催する側のスタッフは人数が少なく大変とのことでした。国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）では、ドイツ在住のイネスさんが国際 YF を担当されていますが、同じドイツでも会場からは遠く離れており、地元ではなかったのスタッフもあまり集められなかったようです。

内藤：前回のマコン大会に参加した子たちがボランティアスタッフで来ているだけで、あとは大人4人で回していました。結構大変だなという印象です。

田原：学校がホストになる場合は、その学校の生徒さんが運営のサポートをしてくれます。そのあたりもいつもと異なるところかなと思います。

中塚：過去の国際 YF 引率者として参加人数についてコメントします。最初に引率した2011年の北京と2013年のリレハンメルは、日本はオブザーバーとしての参加で2名だけでした。2015年のスロバキア大会から7名のフルメンバーになりました。2名だけのときは、他のオブザーバースクールの2名と仲良くなって行動をともにすることが多かった印象があります。フルメンバーの7名で来るところは、国にもよりますが、同じ国の生徒同士が固まってしまう傾向があるという印象があります。今回は2~3人ずつで、それぞれがいろんなところに出やすい人数と規模だと感じました。みな条件が一緒なので、自分たちのコミュニティから気軽に出ていきやすいムードになったのかなと思いました。

質問：国際 YF 開催の持続可能性ということについて人数とのかかわりで思ったことです。例えば開催地をある程度固定して、ボランティアや講師が世界から集まってくるやり方のほうが持続可能性は高まるのではないのでしょうか。例えば日本でやるとなると、ホストは大変です。世界から講師が集まって行うなどの形式は考えられるのでしょうか。今回のユースフォーラムを経ての感触をお聞きしたい。

内藤：教員同士の話で「次回はどうする？」という話がすごく多く、「日本に行きたい」という話も教員ミーティングでありました。しかし実際に日本でできるのかと考えたときに、これだけのことができる場所はどこだろうと悩みます。運営できるボランティアとか、学校を巻き込んでできるかというとなかなか大変だなと思います。日本では国内 YF から選考する形であり、特定の学校が担っているわけではありません。地域で固まるのもどうなのかなと思います。異国に行ってみて感じることや、自分の目で見て実際の空気を感じるのも大事だと思います。

来田：もし日本でやるとしたら青少年記念センターですね。運営は大変だろうと感じています。ユースフォーラムにエントリーしてくれた子たちがボランティアとして参加できる形などを模索すれば、高校生たちの経験値は高まるでしょう。一方で講師の確保は大変だと思います。

Ⅲ. 国際ユースフォーラムの実際②ー印象的なプログラム

今回一番大変だったのが、大雨の中のスポーツテストです。種目としてはクロスカントリー、砲丸投げ、三段跳び、障害物走とボーリングです。朝から雨がひどく、どうするかという話は出ましたが、みなびしょ濡れの状態で行いました。走って転んだり、寒くて震えていました。事前にイメージしていた活動とは違いましたが、記録はすべて掲示されました。赤色は再テストかなと思っていましたが、結局は何もありませんでした。一応合格点は決められていましたが、雨だし寒いし、とりあえずやればよいという感じで終わりました。日本の中では飯塚さんが、すべてにおいてよい記録でしたが、ほかの学校の生徒たちも身体能力は高く、走るのが速い子が多かったですね。

砲丸投げと言っても、岩を投げる競技でした。三段跳びは、両手に重りを持ったまま跳ぶものです。先生たちがそれぞれの種目についてサポートします。練習はなく、いきなり本番でした。クロスカントリーは2km ないぐらいの距離で、自然の中を走ります。3組に分かれて走りました。疲れ切っていました。



スポーツ活動

スポーツを通じて互いに高め合う

- ・ 自己の限界に挑戦

- ① クロスカントリー (約2 km)
- ② 砲丸投げ
- ③ 3段跳び
- ④ 障害物走
- ⑤ ボーリング



パラスポーツ体験

シッティングバレー/ブラインド走
ブラインドガイドツアー



スポーツ活動の中にパラスポーツの体験もありました。このあたりも、前日の教師ミーティングでアイデアを出しながら決めていました。雨も降っていたので、室内でやれることは何だろうということでシッティングバレーをやったり、目隠しをした状態で走ったり、宿泊施設の中をガイドするツアーを自分たちでやるというようなパラスポーツ体験が為されました。南アフリカの子は日本と仲が良く、ずっと一緒にいました。

こういった形でスポーツ活動やディスカッションダンスやミニエキスポなどのアクティビティを行いながらクロージングセレモニー。本当にあつという間の時間が過ぎていきました。アートパフォーマンスの発表があり、クーベルタン賞が全員に授与される式典でした。



引率教員たちの感想として、今回はセレモニーがすごく短かったというのが一番のコメントです。フランスの時は2時間ぐらいありましたが、今回は必要なことだけやりました。

日本チームは、クーベルタン賞を全員がもらえるようにという目標を掲げて準備してきたので、全員がもらえてよかったです。がんばった証としてこういうものを貰いながら、オリピズムを広めていくところにつながればよいと思います。

クロージングセレモニーでそれぞれの苦労をねぎらった後、またダンスパーティで締め括られました。教師ミーティングでも常に楽器を持ってくる人がいます。日本では踊る習慣がありませんが、これが日常の習慣なのだということを感じました。

クロージングセレモニーの次の日は、一日中観光となっていました。観光といってもオリンピック記念パークで一日を過ごただけです。塔に上りミュンヘン市内を見下ろし、ミュンヘンオリンピックの会場を見ながら、最後にミュンヘン市街に入っていくという一日です。この塔より高い建物はミュンヘンにはありません。

オリンピックスタジアムは1972年当時から部分的に改修されていましたが、そこを実際に走ることができました。水泳をやっている私には、陸上競技場を一人で走る経験がなかったので感動でした。

その後は市内を散策です。しかしドイツでは日曜日はどこもお店はあいておらず、カフェしかやっていませんでした。観光といってもほとんどは歩いていて、教会やマリエン広場という塔や劇場を見ました。生徒たちは朝7時に出て夜7時に戻るまで、10km以上も歩いてくたくたでした。みんなでお別れをしながら最後の食事です。

ちょっと観光（現地の人との交流）

ミュンヘンオリンピック記念公園 / ミュンヘン市内散策（ミュンヘン学生と一緒に）



ドイツのコロナ事情

今回は PCR が大変でした。日本のコロナ対策は非常に厳しいというのを改めて感じました。人々がマスクをしていないということは海外で感じます。ドイツの PCR センターに行ったとき、そこには誰もいませんでした。ミュンヘン市内に1カ所しかありませんが、ミュンヘンの人は PCR なんて誰もやらないんだなと思いました。

しかしこれを出発の72時間前にやらないと日本には帰れません。今回最も気になっていた、責任ある仕事がこれでした。途中で観光を抜け、スタッフに送ってもらい、全員の陰性を確認して夜を迎え、その日のうちに帰国することができました。

今まで画面でしか見ることがなかった国際 YF にじかに接することができ、オリンピズムとのつながりが国内だけでなく国外に出ても、言葉がうまく通じなくても、思いがあれば通じるのだということ、いろんな活動を通して感じることができました。こういったものが国際だけでなく国内のさまざまなところで広がりながらつながっていけばよいと思います。

中塚：内藤さんの報告から、コロナ禍のユースフォーラムがとても有意義だったことが伝わりました。ありがとうございます。

<ディスカッション②>

質問：今後の国内 YF のあり方や可能性を意識しながらの質問になりますが、今回の参加者は運動神経が良い子が多いのか、苦手な子もいたのか、教えてください。

内藤：めちゃくちゃアスリートというような人はいませんでした。過去には海外の生徒でジュニア代表がいたこともあったようですが、今回に関しては、身体能力が高い子はいましたが、一つの競技でトップレベルで競い合うような子はいなかったと思います。それよりも国際交流に興味がある子が多い印象です。海外の参加者はクーベルタンスクールから選抜されてくるとお聞きしています。その中で意欲ある子連れてきたという話を聞きました。

中塚：参加人数が多かったときは、アスリートと言える人たちとそうでない人たちが混在していました。アフリカから来た子の中には、プールでの近代泳法で泳いだことがない子もいました。種目ごとの得手不得手がみられる生徒も大勢いました。スポーツが長けているというだけでなく、国際交流に興味があるということで参加する子もいます。それぞれの得意分野や関心のありかは異なるけど、スポーツを通してお互いを知り、できない人を応援し教えあう。そこにまた良さがあったと思います。

国内 YF は、関係する先生方の学校だけでなく、たとえば東京都高体連研究部の協力で告知してもらってきました。しかし全国各地の、いろんな人が参加できるようにと考えたときに、必ずしも体育・スポーツの得意な人、アスリートに限定しなくてもよいのではと考えます。アスリートの卵の人たちは、そこでオリンピズムを学んでもらえばよいわけです。むしろアスリートではないけど、このような国際交流の分野に少しでも興味を持ってくれる人がオリンピズムに触れる方がよいのではないのでしょうか。私が参加したこれまでの国際 YF は、ひと言でいうと「心技体が充実」していないとクーベルタン賞が得られないものでした。クロージングセレモニーで、3割ぐらいが賞をもらえていない印象です。スポーツテストで基準点に達しなかった子とか、筆記テストで何回も追試を受けたけど受からなかった子など、たとえ存在感があってももらえませんでした。今回はそういう意味でも異例で、「集まってくれてありがとう」という意味なのかなと思いました。

こういったことを踏まえて、国内 YF をどうしていくのかを最後に議論したいと思います。

IV. 国内ユースフォーラム 2022—TOKYO2020 のレガシー

国際 YF 終了後の 2022 年 12 月 26 日(月)～27 日(火)に、「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム (国内 YF) 2022」を開きました。本日参加された方は何らかの形で関わってくださった方が多いのですが、簡単に国内 YF2022 を振り返り、今後についてディスカッションできればと思います。

2020 年度のコロナ禍以降、国内 YF はすべてオンラインで開催してきました。初年度は 2020 年末ですが、意外にいろんなことができると感じました。2021 年度から主催は日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CJPC) となり、「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム」の名称としています。共催は特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー (JOA)、主管は CORE・中京大学、そして NPO 法人サロン 2002 です。2 年目はさらに工夫を重ね、海外からの講義や視察もありました。

そして国際 YF を終えた 2022 年末、国際 YF の選考会ではなく、純粋にオリンピズムを学び、互いの交流を深めることを目的として、ハイブリッドで開催しました。

10月ごろに告知・募集を開始し、年末のこの時期に参加できる高校生を募りました。関東から13名、東海から6名の計19名の高校生が集まりました。おなじみの学校に加え、新たに厚木北高校から2名が参加しました。

スケジュールは右のとおりです。

初日は基本的にみな自宅から参加ですが、中京大附属の生徒は学校から参加したようです。前年度同様、中京大学のミュージアム見学とグループ活動がオンラインで為されます。午後からはクーベルタン、嘉納治五郎についての講義です。それぞれの居場所で同じ講義を受けられるのはオンラインの特長です。最後に第13回国際 YF 参加報告ということで、内藤さんと参加生徒が、ミュンヘンでの濃い1週間を報告してくれました。

2日目は3年ぶりの対面です。東海地区は中京大附属高校、首都圏は筑波大附属高校に集まりました。前日にオンラインで意見交換しているのので、2日目は最初からフル回転でした。

スポーツと平和の講義は両会場をオンラインでつないで内容を共有しました。

続く OVEP の演習は「オリンピックのレガシー」についての内容です。エクアドルから筑波大に留学しているカレンさんも英語でコメントしてくれました。各大会の競技施設が大会後にどのように使われているのかを調べ、各グループで大会後の施設利用についてのアイデアを発表する内容です。カレンさんにもわかるように、発表は英語でした。苦戦していました。

その後、参加者は着替えて運動プログラムです。グラウンドで十分な W-up のあと、初心者でも楽しめる「モルック」を行いました。東京地区と東海地区でそれぞれ紅白2チームに分か

日本ピエール・ド・クーベルタン ユースフォーラム2022

◆12月26日(月) オンライン

- 9:00~10:00 オープニング/オリエンテーション(含学校紹介)
- 10:10~12:40 演習① 中京大学スポーツミュージアム活動
- 13:40~14:30 講義① クーベルタンの思想と行動からオリンピックを考えよう
- 14:40~15:30 講義② 嘉納治五郎とオリンピックムーブメント
- 15:45~16:15 第13回国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム参加報告

◆12月27日(火) 対面(筑波大学附属高校&中京大学附属高校)

- 9:00~9:10 諸連絡
- 9:10~10:00 講義③ オリンピックの平和運動
- 10:10~12:30 演習② OVEPを用いた特別講義、グループディスカッション
- 13:30~14:20 グループディスカッション発表
- 14:40~16:10 運動プログラム(モルック)
- 16:25~17:00 クロージング
- 17:00 解散

◆12月28日(水) 課題レポート提出



れ、2会場の経過を共有しながら紅白戦形式で楽しみました。

少人数の国内 YF でしたが、国際 YF とはつながらない年もこのように続けていくことが大事です。2023 年末も、対面とオンラインを併用して 2 日間もしくは 3 日間、できれば宿泊を含めて開催したいと計画しています。TOKYO2020 のレガシーとして続け、育てていきたいと考えています。

<ディスカッション③>

内藤：今回、国際 YF に引率者として行かせていただきましたが、国内 YF はいつも同じような学校が参加しています。少しでも多くの人に参加してもらうにはどうすればよいかを考えていかないと、仲間うちで回しているだけだともったいないと感じます。国際 YF がすべてではありませんが、今回のような報告を通して紹介していきたいと思います。魅力と感ずる部分に惹かれる傾向が高校生は強いと思います。何を魅力とするのかを整理して発信していく必要があると思います。国際 YF ありきの国内 YF になってしまわないようにしないといけません。参加してくれた高校生は、全員もれなく、参加しよかったと言ってくれています。

田原：いまの内藤先生の発言に関連して、今回初めて参加してくれた厚木北高校の話をしてします。この学校にはスポーツ科学、体育科のようなコースがあります。今回参加してくれたのは 3 年生で、卒業論文をオリンピックに関連したテーマで書いた生徒です。その生徒たちにその学校の先生が国内 YF の話をして参加を勧めてくれたのです。全国を見渡すと、体育科あるいはスポーツコースを持っている高校はたくさんあるので、そういったところにアプローチしてみるのもひとつの方法かと思います。オリンピックムーブメントについては、高校 1 年の体育理論で学ぶことになっています。その学習をさらに発展させた形でより深く学んでみよう、と周知していくといいかなと思いました。いきなり拡大しすぎて運営面で難しいところがあります。厚木北高校に参加してもらったように、学校でオリンピックに興味を持つようになった生徒さんにうまくつなげてもらうと良いのかなと思いました。

来田：東京大会でできた大学連携があります。その関係で大会後にレガシーを残しましょうということになり、大学連携レガシーネットワークが設立され、真田久先生が委員長、私が副委員長をしています。大学間の連携、情報交換を途切れさせないようにしようしているのですが、月に 1 回メールマガジンの発行をしています。大学生のボランティアを集めたり、附属高校があるところに声をかけてくださいというような情報提供はできると思います。高校生に参加してもらうことはもちろん大事ですが、大学生がボランティアで参加してもらうと組織そのものが若返りますし、自分の卒業した高校に連絡してもらうこともできます。このように周辺からのアプローチも使ってみたらよいと思います。使えるチャンネルは全部使った方がよいでしょう。

中塚：高体連サイドからアプローチしてきました。大きな組織ですが、まずは東京都高体連研究部が関わる流れはできつつありました。しかし現場の先生は乗ってきません。対面で良さを伝え、広げていくことは少しずつできています。自由学園が関わるようになったのは、サッカー仲間でもある男子部の内田さんに声をかけたところからです。オリンピズムは普遍的な概念だから、いろんな高校の校訓とも重なってきますし、これを否定する人はいないでしょう。もっと広げていきたいですね。

青柳：運営の厳しさはともかく、必ずしも体育・スポーツが専門ではない学校や生徒さんへも、アプローチやネットワークを広げていくという話がありました。例えば、前回、中塚先生が声をかけてくださったのは東京都高体連研究部です。日本の学校教育システムにはトップダウンの傾向があり、文部科学省、各自治体、教育委員会において共感が得られるとそこから各学校の校長先生へ話が届いて

いく側面があるかと思われませんが、その壁が大きいのではないのでしょうか。例えば、東京都であれば、学校間のネットワークに教育委員会が結びついているわけで、東京 2020 大会を契機としたオリパラ教育であれば、東京都教育委員会や筑波大学さん、日本体育大学さん、早稲田大学さんなどがコンソーシアムを結成しておられました。ご関係の方による過去のお話では、そのコンソーシアムの中で連絡を取ることは可能であるとおっしゃられていました。しかし、各関係者が新たにアクションを起こしたり、実際に参画するとなると、腰が重たくなってしまう部分もあるとのことでした。ネットワークは物理的にあったわけで、そこが生かせればよいと思いますが、何か実際に情報交換をしたり、顔を合わせる機会を作れると、共通認識が得られるのではないかと思います。体育・スポーツの領域を超えて、教育委員会の方々と関わりを持つためには、どうしても見えない壁があるのか、それともアクションを起こしていなかっただけなのでしょう。

中塚：やっていなかったわけではありません。高体連の腰が重いという話をしましたが、少なくとも東京都高体連研究部は、昨年度までは告知協力をしてきていましたが、いまは逃げ腰になっています。今回も東京都高体連事務局の方と話をしましたが、教育委員会が GO を出してくれれば自分たちは動けるといいうい方です。順序としては確かに、教育委員会や文部科学省からトップダウンで降りていけば実現するのでしょうか。そういった準備は 2020 年に向けて、東京都もスポーツ庁のオリパラ教育事業もできていたわけです。本当はその繋がりで TOKYO2020 のレガシーとしてやっていくのが王道ですし、やっていかないといけません。オーストラリアではシドニーオリンピックのレガシーとして、州ごとの国内 YF が始まったと聞いています。アジアで唯一のクーベルタンスクール、北京四中の名前を最近あまり聞きませんが、これも北京オリンピックのレガシーです。東京オリパラのレガシーは何かといっても見えてこないですね。このあたりの国際情勢について田原さん、いかがですか。

田原：国際情勢はだいぶ変わってきています。オーストラリアはヘレン・ブラウンリーさんがオリンピック委員会の教育担当理事をされていて、各州で応募条件を満たした高校生にクーベルタン賞を出して、各州代表者が国際 YF に行く形式ができていましたが、いまはそれを打ち切ってしまいました。ヘレンさんも自分の後継者として若い先生を何度か国際 YF に連れて来ていましたが、そういうのも切れてしまいました。オーストラリアオリンピック委員会の方針転換があったのではないかと思います。また、先日、イネス・ニコラウスさんが健康上の理由により国際 YF の担当を降りたことが CIPC の理事会で報告されました。ではこれからどうしていくのか。CIPC は国際 YF を重要視していますので、継続はしていきますが、これまでと同じ形かどうかはわかりません。みんなで知恵を出し合って新しい段階に発展させようと考えていこうとしています。フランスのクーベルタン委員会が 2023 年 10 月に、世界の国々に呼びかけて高校生のオンライン・ユースフォーラムを開催する計画を立てています。おそらく日本にも案内が来ると思います。これまでの国内 YF に参加した生徒さんの中から選考していくのかなと、漠然とイメージしています。正式な案内が来れば選考していくことになるでしょう。

CIPC の予算の中で、国際 YF のための費用が非常に大きくなっています。お金がかかりすぎているという意見もあります。世界中から集まって 1 ヲ所でするのではなく、大陸別に分けてやるべきだとか、オンラインを取り込むべきというような意見も出ています。引率経験のある先生方の意見も聞きながら議論しているところです。流動的ではありますが、そういった状況です。

中塚：なかなか厳しい状況ですね。国際情勢を見据えながら、我々がリードしていく気概を持って国内 YF を考えていきたいと思います。最後に内藤さんから、全体を通してコメントをお願いします。

内藤：11月なので少し前の話ではありますが、ドイツのことはよく覚えています。どれも良い思い出で、行かせていただいてよかったと、ポジティブな考えしか出てきません。オリンピズムを広める活動ということで、今回の報告はよい機会となりましたし、先ほども言いましたが、この活動をどうつなげ、広げていくのか。私ができることをやっていきたいと思います。いろんな先生が長年創り上げてきたものです。今後もできることを頑張ります。ありがとうございました。

(続きはオンライン懇親会)